



ンの墓がトゥバンにある。現在のトゥバンは同名の県の県都である。

グレスック (Gresik) は同名の県都であり、人口 74 万人、マドゥラ海峡に臨む港市である。13 世紀頃からの港町で中国の史書には“革児昔”と記され、古来、東西貿易の良港として知られた。17 世紀初頭までは東部ジャワ最大の港であったが、VOC 時代に東南 25km に新興したスラバヤに繁栄を奪われた。

現在のグレスックはセメント、石油化学、鉄鋼などの工業都市である。その原動力はジャワ海で産出する天然ガスである。LNG として輸出するほどの規模でない天然ガスはグレスックを受入れ基地としている。グレスックの歴史上の役割と現状に日本の“堺”のイメージが重なる。パシシル最大都市であるスラバヤは別項で詳述する。

⇒136.パシシル・中部ジャワ

### 138. トリニル遺跡

1891 年、ソロ川中流の「トリニル (Trinil) の河岸段丘」で化石に混じって人と思われる頭蓋骨と大腿骨が発見された。発見者のオランダ人のデュボア (Eugene Dubois) は大腿骨が直立歩行を示していたことから“猿人”であると発表した。

デュボアは進化論の信奉者で人と猿をつなぐミッシングリンクの存在を確信し、オランウータン(→071)や手長猿の類人猿が生存しているインドネシアをその候補地と考えた。

初めはスマトラ島のパダン高原で発掘作業を行い、1890 年に中部ジャワに転進した。ジャワ中央のケンデン丘陵は第三紀の鮮新世から第四紀更新世にかけての地層であり、これらの地層から哺乳動物の化石が発見されたからである。

人の頭蓋骨の容量は 1200~1500cc であり、チンパンジーは 500cc である。発見された頭蓋骨の容量は 850cc と計算されたことからヒトと類人猿の間に位置する「ピテカントロプス・エレクトゥス (Pithecanthropus) = 直立原人」と名づけた。

デュボアは地質学者ではなく医学者であることから、骨の発見された地層の信憑性について論議を呼び、学者もはじめは半信半疑であった。歯がオランウータンのものと鑑定され、紛い物との疑惑をかけられデュボアはノイローゼになった。

36 年後の 1927 年に中国で北京原人が発見され、両者の類似性が認められことからデュボアの発見の意義が再評価された。ピテカントロプスは 150-50 万年前と推定されている。北京原人、ピテカントロプスの両者を学名でホモ・エレクトゥス (Homo erectus) という。

トリニルではソロ川は侵食作用が大きいいため河岸では地層が露になっている。ブンガワン・ソロ(→985)で歌われているように雨季と乾季の流量の差は 4~5 倍にも達する。発見されたのは下の層であるので発掘作業は乾季だけという制約の中での作業であった。

その後 1934 年、ドイツ人のケーニヒスワルド (G.H. Rvon Koenigswald) によって上流の中部ジャワ州のサンギラン (Sangiran) でも人類の化石が発見され、トリニルよりもさらに古いことが分かった。サンギランでは骨の持参者に金を与えるシステムにしたために、地元住民はジャワ特有のゴトンロヨン方式(→593)に則り、纏まった骨をわざわざ解体して全員で分け合って持ってきたという。専門家からは惜しまれている。その後もサンギランでは化石の偽物が商売になっている。

下流のガンドンの少し新しい地層から発見されたソロ人、ワジャック (Wajak) 洞窟から発見されたワジャック人は6~10万年前の新人<sup>2</sup>である。最近ではフロレス島(→217)からも原人の骨が発掘<sup>3</sup>された。

植民地時代にはジャワ原人の発掘品はオランダに収集され、日本の占領時代には日本へも流出したが何れも返還され、現在はバンドゥンの地質研究所(→108)とガジャマダ大学(→120)に保存されている。

トリニル遺跡には発見100年を記念して1991年にトリニルに博物館が開館した。世界遺産に登録されたのはサンギランの方である。

### 139. ポノロゴのレオッグダンス

マディウン (Madiun) は東部ジャワ州の同名県の県都で人口19万(1992年)の中都市である。ラウ山(→132)、リマン(2563m)山の二つの火山の間を流れ、ソロ川に注ぐマディウン川が形づくる盆地に位置する交通の要地である。東西の山が高いためインドネシアで最も日照時間が短い都市といわれる。

インドネシア歴史においてマディウンの名は対オランダ独立戦争最中の1948年に勃発した共産党のマディウン事件(→326)の舞台になったことで知られる。その17年後、1965年9月30日事件(→384)の失敗で共産党はスカルノ大統領を連れてジャワに撤退して再起を図ろうとした。スカルノ大統領はマディウン行きを渋り、ボゴール宮殿(→113)に難を避けたが、あいまいな行動は命取りになった。

ポノロゴ (Ponorogo) はマディウンの南方にある県都である。町のレオッグ (Reog) という伝統ある舞踏が有名である。レオッグという虎の仮面に孔雀の羽根をつけたシンガバロン (SingaBarong) が登場する。バリ島のバロン(→954)の仮装に似ている。シンガバロンの仮面は重く50kgにもなる。それを自在に操りながら舞踏を行うのは尋常の技ではない。パフォーマンスには付き人と馬型の人形が登場し、舞踏はトランス(→576)になる。ちなみにジャワ島にはクダ・ルンピン(→063)というトランス・ダンスがある。東部ジャワにはその他にもジャラン・クパン (jarankepang)、タリ・クスルパン (tarikesurupan) というトランスを伴う踊りがある。

舞踏する者はワロック (warok) といい、彼らは女性との関係を絶ち、レオッグの習得に専念することでロック (roh) という霊魂が体内に入る。ゲンブラ (gemblak) という若い少年が女性の扮装をしてワロックに従う。ポロノゴの住民は超能力を有しており、肉体的にも精神的にもタフであり、あちらの方でも絶倫であると信じられている。

何かしらポロノゴに漂う異端者の街の匂いはレオッグに因る。レオッグの起源はクディリ朝(→245)の頃という説もあるが、通説は15世紀マジヤパヒト王朝(→248)時代にキ・アジェン・クツ (Ki Ageng

<sup>2</sup> 人類は猿人⇒原人⇒旧人⇒新人と進化した。ワジャック人はデボアが洞窟で発見した人骨で新人のものとされている。沖縄で発掘された港川人と共通することから、日本の縄文文化の東南アジア起源説を裏付けるものである。⇒NHKスペシャル日本人プロジェクト編「日本人はるかな旅②」2001 NHK出版、道方しのぶ「日本人ルーツの探索マップ」2005 平凡社新書

<sup>3</sup> フロレス島のリアン・ブア (Liang Bua) 洞窟から身長1mの成人の人骨が発見されフロレス原人と名づけられた。時代は9万5000年前から1万3000年前である。小さな原人が1万年前まで生存していたことが明らかになった。孤島で原人が小型化するという特殊な変化をしたものとして今後の解明が待たれる。村の住民の身長が140cm以下で原人の血を受け継いでいるような現地を訪れたルゴ記事が掲載された。⇒朝日 2006/2/28、2005/3/4)

Kutu) という詩人である僧によって完成された。



2007/12/30 マディウンにて Reog 編者撮影

キ・アジェン・クツは時のマジャパヒト王国のクルタブミ (Kertabumi) 王治世下の宮廷の腐敗と中国人の妾への反発から、世俗の地位を捨てて王を批判した。僧に従った弟子の集団がワロックといわれた。シンガバロンは正義を象徴し、トランスになった馬はマジャパヒトの脆弱な軍隊を象徴するらしい。

とにかく民衆に受け入れられる反体制芸能は為政者には不気味な存在であった。植民地時代には迷信を煽るという理由で禁じられた。独立戦争下のマディウンの反乱の際に、ワロックが反乱派に同調したことから政府によって弾圧された。羽黒山の<sup>しゅげんどう</sup>修験道、現代中国の<sup>ほうりんこう</sup>法輪功などと比較すると面白いと思う。

現在は観光の目玉としてレオッグが復活している。ジャカルタの何かのパレードにも参加していた。多分、反体制のエネルギーは骨抜きにされているはずである。

## 140. スラバヤ市

スラバヤ (Surabaya) は人口約 300 万人を擁する東部ジャワ州の州都であり、首都ジャカルタに次ぐインドネシア第二の都市である。マドゥラ島を隔てた水路に臨む良港である。ジャワ海沿岸の古くからの交易港であり、東部ジャワを商圈とする港ではグレシックが先行したが、VOC(→272)時代にスラバヤが代わった。

湿地帯に町が築かれたのはワリ・ソゴ(→712)のスナン・アンペルが布教の地盤としたことによる。アンペルの名にちなむスラバヤ最古のスナン・アンペル (Sunan Ampel) モスクが市の北部にある。由緒あるモスクはジャワ・イスラムの聖地であることから、スラバヤの起源は門前町ともいえる。

19世紀初頭、マタラム王国からスラバヤの地の割譲を受けた VOC によって要塞と堀が築かれた。以降、東部ジャワ統治の中心としての発展はめざましくジャワ島有数の近代都市となった。ブランタス川とソロ川(→130)流域のジャワ島の最も豊かな平野を後背地にしており、東部ジャワの農産物の集散地であり、特に砂糖で知られた。

オランダ植民地時代は《バタビアは政治の中心》であり、一方《スラバヤは経済の中心》であり、スラバヤはバタビア (独立後ジャカルタに改名) に拮抗する都市で<sup>きつこう</sup>あった。太平洋戦争前までの日本商社の営業の拠点はバタビアでなくスラバヤであった。

かつてスラバヤはジャワ島の経済の中心であったが、独立後は首都ジャカルタへの投資のウエイトが高く、経済においてもジャカルタが圧倒的に優位である。スラバヤに高層ビルが少ないのは地盤が悪いこともある。とにかく一点への過度集中はインドネシアでも例外でなく、日本の大阪と東京の関係に似ている。ちなみに〈東部ジャワ州〉と〈大阪府〉は姉妹州の関係にあるのもその辺の縁であろう。

スラバヤは良い港の港湾都市であるが、インドネシアの工業化に伴う物資の輸送もジャカルタのウエイトが高くなった。ただし軍港としてスラバヤはインドネシア海軍の拠点である。海軍軍人の巨大な像がスラバヤ港の目印である。

スラバヤは経済ばかりではない。インドネシア独立戦争はまさにスラバヤの戦いから始まった。日本に戦勝した連合軍を代表してスラバヤへ進駐した英国軍はインドネシア独立を認めなかったため、スラバヤ市民は11月10日に実力行使に立ち上がった。

当時の首都ジャカルタにはある意味ではオランダ時代を懐かしむ雰囲気もあったのに対してスラバヤ市民の独立を求める実力行使はインドネシア独立への不退転の決意となり、国民に燎原<sup>りょうげん</sup>の火となって広がった。

スラバヤの闘いはインドネシア独立の記念すべき“英雄の日”として国の記念日(→710)とされている。街に高くそびえるシンボルは“Tugu Pahlawan (英雄の塔)”である。その他にも戦闘に倒れた市民を記念する銅像が多い。

大都市のかかえるスラムなどの超過密の社会問題はジャカルタと共通である。

⇒321.スラバヤ 100 日戦争

## 141. ジェンバタン・メラ

スラバヤは河口の町であり、市内を流れるブランタス川分流のマス (Mas) 川とその分岐流に多くの橋がある。橋の多いことも大阪と共通している。その橋の一つがジェンバタン・メラ (Jembatan Merah=赤い橋) である。橋名の由来は“血の赤”である。



KOTAMADYA  
SURABAYA

スラバヤの語源は「スロ (鮫)」と「ボヨ (鰐)」であり、スラバヤの市章になっている。両者は海と陸に縄張りを決めて共存していたが、ある時、川はどちらの縄張りであるかについて激しく争い血が流れ赤く染まった。その橋がジェンバタン・メラである。

植民地時代のスラバヤでコメディ・スタンブル<sup>4</sup>という大衆演劇が結成され人気を集めた。アラビア、インドの物語や中国の水滸伝、シェークスピアも登場し、マレー語で演じられるという混血文化の最たるものである。今日のサンディワラ(→829)の前身である。

出し物にクロンチョン(→984)の音楽が演奏された。作曲家グサン(→985)が戦前に作詞作曲したクロンチョンの『ジェンバタン・メラ』は橋で出会った男と女の切ない恋の歌である。

<sup>4</sup> コメディ・スタンブルのスタンブルは当時のアラブ世界の中心地であったトルコ帝国のイスタンブールのことである。興行主は華僑であった。

たとえこの赤い橋がくちはてようとも私は誓う  
いつまでもいつまでもあの人をここで待つと

男と女の出会いの場としての橋は象徴的な意味を持つ。中国の七夕伝説のように川を隔てて異なる世界の唯一の接点が橋である。芝居の装置でも男と女の出会いの場に橋は欠かせない。邦画では『君の名は』の数寄屋橋がある。

クロンチョンのジュンバタン・メラの人気にあやかり、ビントアン・スラバヤ劇団はジュンバタン・メラを演劇にした。植民地時代のジャワの大衆文化の拠点スラバヤであった。インドネシアになってラジオ、TVの普及で文化も中央集権になり、ジャカルタ発が圧倒するようになったのも大阪とスラバヤは境遇が似ている。

『ジュンバタン・メラ』の演劇のストーリーは橋でめぐりあった男女が再会を誓って別れる。男は軍人でインドネシア独立を求めてオランダと戦う。戦いはインドネシアの勝利になるも、その間に女は死ぬ。

再会の日にも何も知らない男はいつまでもいつまでも待っている、というものである。1943年に演じられた演劇ジュンバタン・メラの名は高まり映画にもなった。

時は経過して1945年10月、英国のマラビー旅団長がジュンバタン・メラ近くで殺されたことを契機にスラバヤの戦い(→321)が始まった。そしてスラバヤの町は市民の血で文字通り赤くなった。

ジュンバタン・メラは来るべきスラバヤ戦争の予言であった。インドネシア人にとってジュンバタン・メラの名はロマンスに愛国が重ね合わされた<sup>きんせん</sup>琴線にふれる場所となった。

実際に橋のある場所は市の北部の植民地時代の建物や倉庫の残る寂れた旧市街である。本物のジュンバタン・メラは有名になったので欄干は赤色に彩色されている。行って見る所ではなく、想像に止めた方がよさそうである。

## 142. トロウラン遺跡

14世紀に東南アジアに君臨したマジャパヒト王国の都はスラバヤの西南に位置するモジョクルト南郊の「トロウラン (Trowulan) 村」で発見された。中国の陶磁器の大量の破片や銀貨などの出土が大帝国の王城の所在地の証明である。

高さ10m以上の城壁で囲まれた広さ100k m<sup>2</sup>の王城であったと推定されている。建造物は赤レンガのテラコッタであったため、熱帯では自然の還元力の前にかつての王都もトロウランという名の東部ジャワのありふれた村になっていた。航空写真によれば王城を廻って運河網らしきものがあるらしい。

トロウランにはいくつの建造物の遺跡が散在しており、ありし日のマジャパヒト王国の栄光を偲ばせる。14世紀の建物といわれるチャンディ・バジャンラトゥ (Bajangratu) はクラトン(→121)の中心であったらしい。16mの華麗な門が1991年に復旧された。

チャンディ・ブラウ (Berahu) は王族の墓であったらしい。豪華な<sup>もくもく</sup>沐浴場遺跡のチャンディ・ティクス (Tikus) は“鼠寺”という意味である。地下に巣を作り農作物に害を及ぼす鼠を退治するために発掘して偶然に沐浴場が発見されたという即物的な命名である。コラム・セガラン (KolamSegaran)

は中央にパビリオンの浮く池である。



チャンディ・ブラフ 2007/5/17



チャンディ・ティクス 2017/1/31



チャンパ姫墓所  
2007/5/17 編者撮影

遺跡の一つには 1448 年の銘があるチャンパ王女<sup>5</sup>のイスラム様式の墓はヒンドゥー遺跡の中では際立った存在である。彼女の影響でマジャパヒト王室にイスラム教が浸透し、王国の支配層はイスラム化したらしい。

宮中と思われるチャンディ・クダトン (Kedaton) は建物の礎石だけである。スムル・ウパス (SumurUpas) という時代があった井戸がある。マジャパヒト王国の最後の王ブラウイジャヤ 7 世(→249)は王国の敗北を知るや俄かにスムル・ウパ

スの井戸から消えた。

遺跡群の中央に 1987 年に改装された国立トロウラン博物館がある。遺跡からの収集した出土品の展示が中心であるが、ベラハン寺院のウィスヌ神像姿のアイルランガ王(→333)の彫像が収納されている。



チャンディプナタラン  
2007/12/16 編者撮影

大帝国マジャパヒトであるからにはボロブドゥール遺跡(→126)を上回る壮大な王宮や大寺院遺跡があっても不思議ではないが、いまだそれらしいものは発見されていない。トロウランは政治、経済の中心地で、マジャパヒトの宗教の中心はブリタル市の北東 12km にあるプナタラン (Penataran) 寺院であったらしい。

プナタラン寺院はマジャパヒト歴代の王によって建てられた霊廟である。本殿、ナガ堂など 7 個の建造物と巨大な塔が建

てられていたと思われる基礎壇が残っている。

マジャパヒト以前の寺院の建築資材は安山岩であるため黒っぽい、パナタラン寺院はレンガ製であり茶っぽい。ボロブドゥール遺跡やプランバナナ遺跡と比較するとマジャパヒト帝国の威光の

<sup>5</sup> <編者註>一般的にはチャンパの王女の墓地と言われているが、埋葬されている女性はチャンパ王国の華人総代であった Bong Tak Keng の娘で、雲南国の大使 Ma Hong Fu の妻である。(Slamet Muljana)

割には貧弱である感は否めない。

⇒248.マジャパヒト王朝

### 143. パスルアン市



アルジュナ山遠景  
2009/07/28 編者撮影

スラバヤの南に秀麗な火山アルジュナ (Arjuna 3340m) 山がそびえる。標高 800m の中腹にあるトゥレテス (Tretes) はスラバヤの避暑地である。トゥレテスはたいへん楽しい所である、と某銀行の某真面目氏から聞いた。どのように楽しいかと質問したが、行けば分かる、ということである。残念ながら行ってないのでこれ以上の説明はできない。

アルジュナ山の周囲に東ジャワ王朝時代のヒンドゥー遺跡が多いことはアルジュナ(→948)山の名と関係があるだろう。

「パスルアン (Pasuruan) 市」はスラバヤの南東約 50km、マドゥラ海峡に面した港町であり、同名県の県都である。18世紀初頭にパスルアン国が存在したことがある。

バリ人奴隷の VOC(→272)軍人であったスロパティ (Suropat) は VOC の横暴に叛旗を翻した。その頃、VOC によって廃嫡されて憤慨していた前国王アマンクラット 3 世(→251)と合流して東部ジャワを制覇する勢いにまで拡大しパスルアンに王国をたてた。

王位継承戦争とのからみで王族にはアマンクラット 3 世に同調する向きもあったが、VOC は王室を恫喝してパスルアン国攻撃に駆り立てた。

スロパティは 1706 年に VOC・ジャワ王国連合軍との戦闘で戦死し、アマンクラット 3 世は 1708 年に捕らえられた。スロパティの息子ラクマッド (Rachmad) と部下はなおも VOC とジャワ王室に抵抗し、1708 年にマランで捕らえられた。

オランダ支配に対する反乱を評価されスロパティはインドネシア歴史での国家英雄(→344)の評価を受けている。「スロパティ」と命名された公園や街路がインドネシア各地に存在する。

プロボリンゴ (Probolinggo) はパスルアンの東に連なる同名名の県都である。南部に観光地かつ霊山として名高いブロモ山の登山口である。

ジャブン (Jabung) 寺院はプロボリンゴ近辺のマジャパヒト時代(→248)の寺院遺跡である。東部ジャワの遺跡はほとんどがクジャウエン(→119)にあるが、パシシル側にある数少ない遺跡である。

ブロモ山麓のサピ村のマダカリプラ (Madakaripura) はガジャ・マダ宰相(→335)の領地であった。引退したガジャ・マダはマダカリプラで忽然と消えた。崇高なジャワ人の死に方である。以後、ガジャ・マダに会うことができる聖地とし神秘主義者に崇められている。

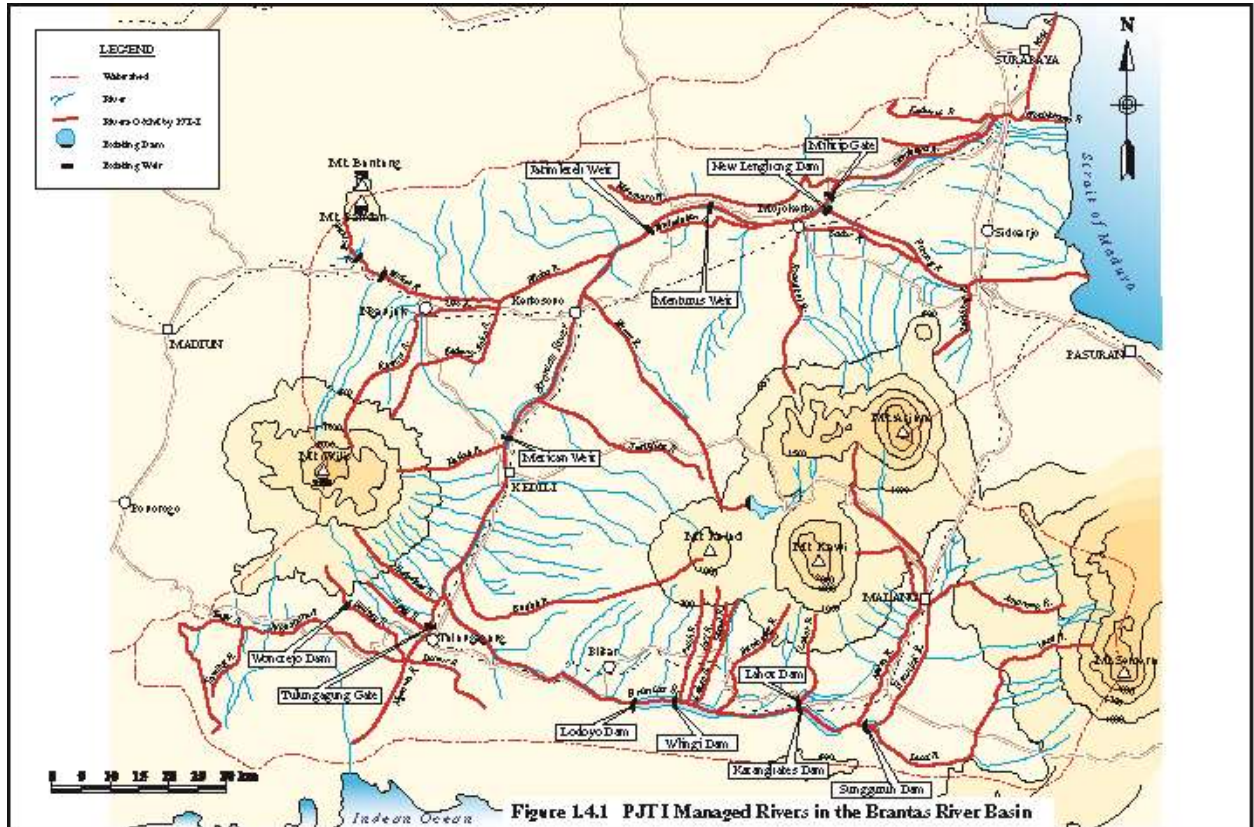
マダカリプラには高さ 50m の二連の清流の滝があるが、単なる観光名所的な滝ではない。鳥肌が立つほど神秘的なものを感じ得る滝である。人が容易に近づけない山奥であったが、駐車場から 1km ほど歩いて滝壺まで行けるようになった。

パスルアンからプロボリンゴにかけての海岸地域は植民地時代に砂糖のプランテーションの開拓



で急速に発展した。ジャワ人に加えて対岸から大挙してマドゥラ人(→614)が移住してきた。この結果、風俗慣習に混合文化が見られるが、西欧文化的要素も加わった混血的色彩が特徴である。

#### 144. ブランタス川流域



東部ジャワの「ブランタス (Brantas) 川」はジャワの霊峰アルジュナ山の南東斜面に発して南に流れ、西に曲がった後に北上してジャワ海に注ぐ。アルジュナ山、カウィ山、クルッド山の火を吐く火山群をチャンディ (寺院) と見たて、右回り回廊のごとく流れる。

ジャワ最高峰のスメル山に、霊峰プロモ山、ウィリス山の支流の水もブランタス川に水を集める。大きく迂回するのでジャワ島の幅 (平均的に 100km) の割に川の距離は 320 km と長い。

10～16 世紀の 6 百年間、クディリ(→245)、シンガサリ(→246)、マジヤパヒト(→248)の古代ジャワ王朝はこの肥沃なブランタス川の流域にあった。ブリタル、マラン、クディリ、ジョンバン、モジョクルトの古代ジャワ王朝にちなむ都市が連なる。

緩やかに傾斜する火山扇状地の裾野に水田が広がる沃野こそジャワの米倉であり、ジャワ諸王朝の経済的基盤であった。

中流にあるジョンバン (Jombang) はジョンバン県の県都であり農産物集散地である。イスラム教の著名なプサントレン(→733)が存在し、イスラム教団体 NU(→408)の本拠地として有名である。第 4 代ワヒド大統領(→455)の出身地である。モジョクルト (Mojokerto) の旧名は何とジャパン (Japan) である。オランダ時代に改名された。

ブランタス川は下流に近づくると暴れ川になり、ジャワ在来の治水技術では手に負えないので放置されていた。しかしながらオランダ植民地時代の近代土木技術により治水が可能となり、ジャワ最大

の砂糖キビの生産地域となった。

ブランタス川の上流にモンゴルの秘宝伝説<sup>6</sup>がある。元帝国（モンゴル）がジャワ島を侵略した際におびたしい貴金属や金塊などの財宝を収奪したが、ラデン・ウイジャヤ(→247)に裏切られて元軍が敗走する際に 70 名のモンゴルの兵士がブランタス川の上流に逃れその財宝を秘匿した、というものである。

場所はアルジュナ山とカウイ（Kawi）山の中の滝壺である。後にポルトガル人が川底に貴金属や金塊を発見し、上流へ遡り滝壺にたどり着いたが、地元住民に襲われかろうじて一人だけが生還しモンゴル伝説が生まれた。

1638 年、オランダの商館長ヤクスペックは調査のため宣教師を派遣した。その報告は住民の容貌は一般のジャワ人と異なり、蒙古人でないかという。ヤクスペックは 1000 名の兵を派兵したが、蒙古人と思われる住民の抵抗は激しく 74 日の戦闘でようやく勝利を手にした。しかしその夜、大爆発音とともに滝壺は崩壊し、住民もろとも秘宝の場所は跡形もなく無くなった。現在もカウイ山中に生き残りの蒙古人の子孫が生存していると信じられている。

ブランタス川の流れはまさにジャワ歴史の流れである。今でも流域はジャワ島で人口の最も稠密な地域である。1965 年の 9 月 30 日事件(→384)後の政治の混乱時には共産党員と疑われた人の死体の放置で水の流れが淀んだのは現代史である。

#### 145. ネヤマ・トンネル

ジャワ島の地形は中央に火山が間隔を置いて並ぶ。北は平地になるのに対して南には低い山並みが障壁となって連なっている。このためジャワ島の分水嶺<sup>7</sup>は島の南に著しく片寄っており、降る雨のほとんどはジャワ海側に流れる。

ブランタス川の流域途中にあったチャンポルダラ湖は水吐けが悪いため雨季になると周辺の田畑は冠水した。この遊水池の南側には低い山が壁となっているが、その山に上れば眼下はインド洋である。従って山腹にトンネルを掘って水をインド洋に落とせば湿地帯が豊かな田畑になることは明白であった。

この工事は太平洋戦争の日本のジャワ島占領期間中に施工された。工事の必要性を主張し実施にあたったのは木原円次という内務省よりクディリ州長官(1942/8-1943/10)として派遣された民政官である。ロームシャ(→305)の大量動員が可能であったとはいえ、占領下という異常事態での短期突貫工事である。

そもそもオランダは土木技術の先進国であった。明治維新後、日本はお雇い外国人に来てもらって先進技術を必死に学んだ。淀川改修工事もオランダ技術者の指導によっている。そのオランダが支配していたジャワ島でオランダが難工事として放置していた個所に日本がわずかの占領期間に土木技術を発揮して完成したことの意義を評価したい。

<sup>6</sup> 出所はモンゴルの秘宝 (by 早瀬隆志) の HP である。紹介されることの少ないジャワの興味ある蒙古伝説が掲載されている。

<sup>7</sup> ジャワ島の川はジャワ海側に流れるが、例外もある。スラユ (Serayu) 川はディエン高原に発し、ウォノボ、パニヤマスを経てチラチャップ東方でインド洋に注ぐ大河である。

完成したトンネルはネヤマ・トンネルと名付けられた。トンネルの掘られた山の名のジャワ語“トンパオヨ”直訳の“寝る山”の日本語がその命名の由縁である。おもしろいことには今日も地元民が「ネヤマ」と称しているという。

日本の撤退後もネヤマ・トンネルはそれなりの成果は上げたが、1951年のクルッド火山(→022)爆発の降灰で通水が不可能となった。

独立後、インドネシアは日本に対する賠償工事(→362)としてネヤマ・トンネルを指名し、ブランタス川総合開発のカランカテス(Karangates)プロジェクトの一環として鹿島建設によってネヤマ・トンネルの改修が行われ1965年に完成した<sup>8</sup>。正式名は南トロナゴン(Tulungagung Selatan)・トンネルという。ダム湖にカランカテスの名をとどめる。



Tulungagung Selatan トンネル  
2006/10/06 編者撮影

戦時中の口径2.5mのトンネルは7.5mに拡大されて別途に掘削されたが、水路は当初のものがそのまま流用されている。トンネル出口からインド洋に滔々と滝のように落ちる水は見事らしいが、場所の関係で訪れることが困難な地点にある。しかし見なくてもこの光景に思いをはせる幾人かの日本人がいることを知っている。

ブランタス川流域はスラバヤ、マラン市の1350万人の人口稠密地域であるが、洪水に悩まされてきた。このため円借款によってブランタス川流域全体の治水対策に加え、灌漑・発電をも目的とした工事を日本の建設会社が施工し著しい成果をあげている。

ODAのダム建設(→743)は幾多の問題が提起されるようになったが、初期のブランタス川の段階での評価は高い。

## 146. 山麓のチャンディ群

10世紀の古代マタラム王国(→244)の東遷に伴いヒンドゥー教も東部ジャワに移り、クディリ、シンガサリ、マジパヒト(→248)の各王朝の寺院群の遺跡が東部ジャワの火山の裾野に点々と散在している。

イスラム改宗以前の建造物遺跡はチャンディ(candi)と称せられる。チャンディは主としてヒンドゥー教寺院遺跡であるが、寺院に限らず霊廟、門、沐浴場などすべてチャンディである。

東部ジャワのヒンドゥー教寺院は何らかの仏教要素を持っており宗教の混合が見られる。さらに寺院の配置が次第に山を取り入れるようになり、ジャワ古来の山岳信仰(→699)との結びつきにヒンドゥーのジャワ化が見られる。これがさらに東のバリ島に遷りアグン山(→179)のブサキ寺院(→180)となってバリ化される。

その後、東部ジャワはこぞってイスラム教に改宗したので、省みられなくなったチャンディが廃墟となって放置されている。組織的な徹底破壊ではなく放置されるに留まったことは重層信仰(→695)

<sup>8</sup> <編者註>1981～1984年にかけて既存のトンネルより低い位置に二本の新しいトンネルを建設しトンネル入り口に水門を設けて水位調整を行えるようにした。

の宗教への寛容性であろうか。

東部ジャワのチャンディを歴代順に追うと、まずプナングンガン東山麓(→024)のベラハン(Belahan)寺院はクディリ時代のアイルランガ王(→333)の霊廟といわれる。プナングンガン山は須弥山しゅみせんとして崇められる霊山である。ジャワ歴史探訪に由緒あるベラハン寺院を訪問した人が、ヒンドゥー女神の乳房からほとぼしる水を受けた沐浴場で村の住民が洗濯や水浴していたのにショックを受けたことを記している。

プロモ山麓にあるシンガサリ時代のキダル寺院(Kidal)は二代目アヌーサパティ王を弔うため息子の4代目ウィスヌワルダナ王が1260年に築いた。仏教とヒンドゥー教の混合の密教的要素が濃くなる。

トゥンパン(Tumpang)村のジャゴ(Jago)寺院は民家の中にあり児童公園のようにになっている。シンガサリ王国第四代ウィスヌワルダナ王の墓廟である。三方の壁面に二段のレリーフが残る。この王は仏教を信仰していたためヒンドゥー様式に大乘仏教が混在し、無造作に転がっているカーラという鬼面が密教の様相を呈している。この寺院の最大の特徴はスメル山を背にする方位に建てられ山岳信仰の表れである。

アルジュナ山麓のシンガサリ寺院はシンガサリ王国の最後のクルタナガラ王(→246)の墓廟である。クルタナガラ王でシンガサリ王国は絶えたが、後継のマジャパヒト王国のガジャ・マダ大臣(→335)が王のために建てた。神殿に収められていたヒンドゥー教の神像はオランダが母国に持ち帰ったらしい。入口の4ねもある巨大なラクササの守護神が際立っていたが、どこかに移動された。シンガサリ寺院の北方にジャウィ(Jawi)寺院遺跡がある。同じくクルタナガラ王の霊廟とされている。

これら上記チャンディ群に続くのがマジャパヒト王国のトロウラン遺跡(→142)である。

⇒245.クディリ王朝、246.シンガサリ王朝

## 147. ブリタル市

「ブリタル(Blitar)市」周辺は古代ジャワ王朝の所在地であるが、インドネシア近代史においては初代大統領スカルノの出身地である。ただしスカルノは生粋きんすいのジャワ人ではない。ブリタル出身のスカルノの父が教師としてバリ島に赴任中にバリ貴族の女性と結婚してスカルノが生まれた。当時としては国際結婚ともいふべき異例な結婚であった。

父母がジャワ島に戻りスラバヤで教師をしている間はブリタルの祖母に預けられ、スカルノはブリタルを故郷とした。彼の人間形成に影響のあったサリナ(Sarinah)という乳母もブリタルの人である。後に乳母の名にちなみ国営百貨店にサリナと名づけた。

スカルノ大統領の墓はボゴール(→114)を希望する遺言を無視してブリタルに定められた。当初は大統領の墓であっても一般人と何ら変らない質素なものであり、隣のスカルノの母の墓の方が立派であった。政治状況から墓参はしにくい雰囲気であった。

しかし、1978年のスカルノ元大統領の名誉回復と“独立の父”の称号に続き、1979年に墓は国費で改装された。バリ風の門構えのある広大な敷地にはジャワ王室になぞらえた三層の屋根の廟が建造され、その中に棺ひつぎが安置されて見違えるばかりの立派な霊廟になった。竣工に際しては当時のスハルト大統領も出席して盛大に式典が行われた。結局は自己の霊廟(→132)を正当化するための気配り

であったらしい。

当初の墓碑は“工学士スカルノ”としか記されていなかったが、改装に際して遺言通りに“人民の代弁者スカルノ”と記された。スハルト体制が揺るぎないものになり、もはやスカルノ元大統領をおそれる必要がなくなったことの証が墓の改装であった。ただし、スハルト体制に含むところがあったスカルノの遺族は政府主催の儀式には一部遺族しか出席しなかった。

それから約 20 年後の 1998 年の政変によりスハルト大統領は退陣に追い込まれ、2001 年にスカルノ大統領の長女メガワティ(→456)が大統領になった。ジャワ人の好きなワヤンの因果応報が目の前で展開されているようである。

今では多くの参拝客が訪れるため観光バスの駐車場が整備されており、土産物屋も賑やかであり、様々のスカルノ・グッズもある。スカルノの墓地も観光名所というのも時の流れであろう。

ブリタル市がインドネシア現代史においても一つ特記されるのはブリタルのペタ(→309)の反乱である。日本のインドネシア占領末期の 1945 年 2 月、インドネシア人防衛義勇軍ペタのブリタル駐屯部隊が日本軍に反乱して蜂起したが、すぐに鎮圧された。

1945 年 8 月の終戦まで日本は何とかペタを制御下においてきたが、唯一の例外がブリタルの反乱である。反乱の動機は食事や待遇への不満で政治的理由は二義的であったが、インドネシア側の歴史ではブリタルの蜂起を“独立前史”として高く評価している。

⇒439.スカルノの生い立ち、310.ブルタルの反乱

## 148. 高原のマラン市

「マラン (Malang) 市」はスラバヤの南 90 km にあって、450m の高地にあるため夜は涼しい。北にアルジュナ山、東にブロモ山とジャワ島最高峰スメル山、西にカウィ山の 3 千 m 級の火山を望む風光明媚の地である。オランダ時代はジャワのスイスといわれ、郊外の温泉地の別荘がオランダ人の憧れであった。

公式統計はとにかくジャワ島ではジャカルタ、スラバヤ、バンドゥン、スマランに次ぐ百万人都市である。乞食が多いことでも有名である。

マラン市は 18 世紀末オランダにより計画的に建設された都市である。ジャカルタの避暑地がバンドゥンであるように、スラバヤの避暑地がマランである。独立後、西部ジャワのバンドゥンはジャカルタと同様に急速に拡大しすぎた。これに対してして東部ジャワは発展の速度が緩和されている分だけ懐かしさがマランに残っている。

アールデコ様式のホテルやキリスト教会などの植民地時代の建物が残り、レトロ感が漂う町である。オランダ人などヨーロッパからの観光客が多い。植民地時代からある“トコ・ウン (Toko Oen)”が人気である。日本人の満州へのこだわりと同じ彼らの“センチメタル・ジャーニー”であろう。

市内の観光スポットにブラウィジャヤ (Brawijaya) 博物館がある。ブラウィジャヤはマジャパヒト王国(→248)歴代の王名にちなむ。マジャパヒト王国の歴史遺物の展示かと思うがそうではない。インドネシアの最有力師団の一つでブラウィジャヤ師団の軍事博物館である。ちなみにブラウィジャヤ大学もマランにある。

博物館の展示は東部ジャワが独立戦争の激戦地であったことを示す遺品の数々であるが、その中に病のスディルマン将軍(→328)を運んだ担架がある。結核でやせ衰えた将軍はインドネシアの完全独立とともに息を引き取った。

インドネシアを旅行すれば飛行機やホテルなどで制服姿の国軍の幹部をみかけることがある。彼らは体格もよく、血色もつやつやしている。国軍の礎<sup>いしづえ</sup>となったスディルマン将軍の生涯を見ていると国軍の今昔の差の大きさを感じる。

マラン近辺に古代ジャワ王朝時代のヒンドゥー遺跡が散在しており、マランはこれら遺跡訪問の基地である。中部ジャワのボロブドゥール遺跡のあるジョグジャカルタは内外の観光客が押し寄せてきている。一方、マラン市は今のところは観光都市になる前の鄙びた味わいを保ち静かである。<sup>9</sup>



ラワンのニアガラホテル  
Wikipedia より

近郊の高地には高原リゾート地が点在している。アルジュナ山麓のバトゥ (Batu) は園芸の町でもある。さらに高地のセレクタ (Selekta) へ行った人が桃源郷のようであったと記している。林檎<sup>りんご</sup>の産地である。

ラワン (Lawang) には華僑が贅<sup>ぜい</sup>をつくして建てた別荘がホテルに改造されている。かなり有名なホテルらしく英文のガイド本には紹介されているが、和文のものにはない。西欧人と日本人の趣味の相違であろうか。

## 149. ブロモ山の旭日

ジャカルタからバリ島へ向かう特別チャーター機に同乗させてもらったことがある。多分、特別サービスの飛行ルートであったのであろう。3千<sup>を</sup>を超える火山が連なる奇観を見ることができた。富士山を1ダースばかり並べたのがジャワ島である。

並びいる火山の中で山の中央が大きく窪み“大釜”を据えたように静かに居座っている一際目立つ山が「ブロモ (Bromo) 山」であった。中央でか細く棚引く煙がかろうじて火山の証明<sup>10</sup>であった。赤茶けた山容の裾野は次第に緑となって広がり、海に落ち込み、かなたにジャワ海が光っていた。火山と海の間緑の空間がジャワの沃野であった。

現在の標高 2892m のブロモ山は元は 4000 級<sup>を</sup>の火山であったが、爆発でマグマが噴出しその跡が陥没したもので、直径 10km のカルデラ (火口原) になっている。

外輪山のプナンジャカン (Penanjakan) 山からカルデラと中央の新火山が見渡せる。火口原の一木一草もない荒涼たる砂漠の風景が圧巻である。ヒンドゥー教の新しい修道院が中東の砂漠の景色のようである、

カルデラにある小さな丸山には伝説がある。鬼が王女に求婚したので王は一夜でブロモ山に穴を掘ることを条件とした。ココナツ椰子<sup>から</sup>の殻で噴火口を掘りかけた。しかし工事が順調に捗るのを見て慌てた王女の仕掛けた鶏の声で万事が終わった。鬼が投げ捨てたヤシの殻がバトゥ (Batok) 山である。

<sup>9</sup> 1980年代からマラン市には大学が多数建てられ学園都市となっている。

<sup>10</sup> 2004年6月ブロモ山は約40年ぶりに噴火して観光客が死亡した。

内外から観光客がプロモ山登山に訪れる。夜明け前にテンガル族の案内で驢馬ろばに乗ってカルデラを横切る。熱帯でも高地の未明の気温は防寒服を着込んでも肌を刺すように冷たい。これもカルデラの外輪山に上がる日の出を見るためである。プロモ山の黎明れいめいの壮観はそれほど素晴らしいのである。

プロモ山の名はヒンドゥーの“火の神・ブラフマ”がジャワ語のプロモに訛ったものである。別名テンガル山ともいう。ジャワ語で「高い山」の意味である。

植民地時代からジャワ人がコーヒーの栽培地を求めてプロモ山の裾野を開拓してきた。しかしコーヒーの栽培は標高 1500 ｍが限界であり、その上はマジャパヒト王国(→248)の末裔といわれるテンガル族の居住地帯である。同山に住むヒンドゥー教を受け継ぐテンガル族はプロモ山へのカソドの儀式を怠らない。

プロモ山の南に連なる山塊の中で煙の棚引く一際高い山スメル (Semeru) 山はジャワ島の最高峰 (3690m) である。名前はヒンドゥー教でいう宇宙の中心のマハメルにちなむ。日本では須弥山しゅみせんといわれる。ジャワ人のみならずバリ人からもバリ島のアグン山(→179)の父として尊敬をうけている。

スメル山は現在も爆発を起こす現役の火山<sup>11</sup>である。南斜面に溶岩流の形跡が生々しい。1981 年は溶岩流のため 160 名を超える死者を出している。所々のグムックという小高い土もりは溶岩流に備えての避難場所である。

⇒659.プロモ山のテンガル族

## 150. バニユワギ地方

バリ島の対岸になるジャワ島最東部の「バニユワギ (Banyuwangi)」は“芳香の川” という魅力的な名前である。地名の由来は次ぎのような伝説である。

かつてシンドワジャ (Sindwaja) という王がいた。美人の妻がいたが、平民の出であったため王の母に嫌われた。母は孫を川へ投げ込み、息子の王には嫁がしたと言いつけた。不信を抱いて詰め寄る王に妻は無実の証あかしの花を見せると川に身を投げた。白い蓮の花がにわかには咲いて芳香を漂わせた。これがバニユワギの名前の由来である。

バニユワギは県名であり県庁所在地の市名である。残念ながら実際のバニユワギ市はありふれた普通の町である。古くからバリ島との交流が盛んで、今日でもフェリーがクタパン (Ketapang) 港から頻りに往来している。

ジャワ島のイスラム化も島の最東部にまで浸透するまで時間がかかり、バニユワギ南部のジュンブル (Jember) 地方はヒンドゥー教を奉じるバランバンガン (Blambangan) 王国が最後まで取り残され、全ジャワ島のイスラム化に逆らった。

バランバンガン王国はマタラム王国(→250)には屈しなかったが、18世紀末に VOC(→272)に滅ぼされた。その後、王国の遺民はイスラム教に改宗したが、ウシン (Osing) 族<sup>12</sup>といわれ特異なジャワ

<sup>11</sup> ウシン (Osing or Using) 族はバニユワギ県に集中しており、人口は 35 万人である。言語と音楽、アダットが特有でジャワ人と異なる。ジャワ、マドゥラ、バリの混血文化らしい。

<sup>12</sup> ウシン (Osing or Using) 族はバニユワギ県に集中しており、人口は 35 万人である。言語と音楽、アダットが特有でジャワ人と異なる。ジャワ、マドゥラ、バリの混血文化らしい。

語方言を話す。バリ島とよく似たセブラン (Seblang) という伝統芸能を伝えている。バランバンガンの名は半島名に残っている。

植民地時代に中部ジャワやマドゥラ島からの移民を受け入れたことからバニユワギの民族構成は多様であり、文化もジャワ本来とは趣を異にする。

バニユワギは降雨が少ないため灌漑池による農業であるが、生産性が高く米の産地として知られる。他にコーヒーやカカオ、チーク材の農園がある。

近隣にバリ島という有名すぎる観光地があるため割を食っているが、多くの観光資源を有している。東端の北にはバルーラン (Baluran) 国立公園があり、バンテン牛(→062)などが保護下のもとに生息している。バルーラン国立公園はジャワからバリ島に向かう幹線に近いことから交通の便がよく植民地時代にオランダ人が狩猟に興じるために公園にした。気候がサバンナ性であるため“アフリカあかしあ”の繁殖に手を焼いている。

イジェン (Ijen) 山の噴火口は酸性の湖であり、熱湯の蒸気が立ち込め壁面は硫黄で白い。登山道では硫黄を採取して運ぶ人とすれ違う。外輪山には現役・退役の火山が輪になっており、南のラウン (Raun) 山は 3332 ㍎もある。中央のイジェン・カルデラの高原ではコーヒーが栽培されている。

東南の突出した半島はアラス・プルウォ (Alas Purwo) 国立公園、南海岸にメル・ブトゥリ (Meru Betiri) 国立公園があり、ジャワ島では最も自然が残っている。ジャワ海に面するスカマデ (Sukamade) は青海亀の産卵地である。かなり不便な所であるため亀のサンクチャアリーとして残った。

## 151. マドゥラ島

「マドゥラ (Madura) 島」はジャワ島に付随する島で、スラバヤの前面に狭い水路を隔てている。頻繁に往来するフェリーでわずか 20~30 分の距離である。この両島を結ぶスラマドゥ (Suramadu) 橋の計画は 2003 年ようやく着工し、資金不足で中断しながら 2008 年に開通の見込みである<sup>13</sup>。長さ 5.4km はインドネシア最長の橋になる。

山梨県の大きさのマドゥラ島は東部ジャワ州に属し、広い意味のジャワ島に含まれるが、ジャワ島並びにマドゥラ島と列記されることもある。過密で知られるジャワ島に劣らず過密の島である。マドゥラ島の住民はマドゥラ人であり、マドゥラ語を話す。インドネシアではジャワ人、スンダ人に次ぐ第三位の民族集団の故郷である。

過去、島にはいくつかの領主の治める小王国があり、ジャワ島の歴史に関わり(→263)を持った。当時の旧跡にアロスバヤ (Arosbaya) に王族の墓がある。島の東側のスムヌップ (Sumenep) に領主のクラトン(→121)が保存されている。マドゥラは島の西部を指す呼称であったが、オランダによる統一支配で全島の呼び名になった。

マドゥラの語源は“蜜のような女”という艶かしいが、島は石灰岩性土壌のやせた土地である。平地は多いが水利もなく乾燥しており木も少ない。マドゥラ海峡を隔てジャワ島の豊穡とマドゥラ島

<sup>13</sup> <編者註>2009 年 6 月 10 日に開通した。



の荒涼は対称的である。

マドゥラ島の中でもジャワ海に面した北側海岸は石灰岩の荒涼たる土地である。人家もまばらで漁村が点在するのみである。スラバヤに近いので海水浴場として売り出そうとしているが、インドネシア人が水泳をレジャーとして受け入れるには肌の露出を嫌うイスラム教の規範がある。外国人はマドゥラ島へ行かなくても他のもっと良いところへ行きたがる。ということで観光地であるが、観光客はいない。

一方、ジャワ島と向かい合う南側には狭いながらも水田が広がり、マングローブ、塩田というインドネシアの風景である。塩以外のマドゥラ島の物産は魚類、煙草、牛、鶏、山羊である。

陸地の貧しいマドゥラ人が外に出るのは必然的である。多くの住民が島外に移住した。特に東部ジャワの海岸部やバニユワギではジャワ人を上回る。近年のカリマンタン島の移住先では先住のダヤク人と敵対する民族紛争(→738)があった。

マドゥラ島が有名なのは“競牛”と“女性”と“塩”の三つである。競牛は別項(→921)を参照されたい。マドゥラ女性は小柄で色は黒い。マドゥラの女性が何故それほど人気があるかは、ジャムウ(→863)を使用しているからだそうである。詳しいことは分からないのでその道の専門家にお尋ねありたい。

マドゥラ島沖のジャワ海で石油・ガスの採掘に成功している。しかしこれらはマドゥラ島をパスして直接ジャワ島に供給されている。貧しいマドゥラ島はジャワの中の地域格差の問題である。スラバヤ海峡をスラマドゥ架橋によってジャワ本土と一体化することにより遅れていた経済開発の進展が期待されている。⇒614.マドゥラ人